

# 研究報告

## 英国と第一次湾岸戦争

ヒュー・ストローン

### 参戦

2021年から振り返ると、英国の第一次湾岸戦争への参戦に関して驚くべきことは、論争が無かったことである。2003年にも英国はサダム・フセイン (Saddam Hussein) 率いるイラクと再び戦った。この時に内政が受けた影響は今も尾を引いている。第二次湾岸戦争への参戦は、労働党と同党の統治能力を大きく傷つけ、干渉戦争という概念と英国の戦略におけるその位置付けに対する疑念を引き起こし、そして、英国と米国のいわゆる「特別な関係」を緊張させた。英国人が、第二次湾岸戦争を正当ではない戦争と見做し、他方で、第一次湾岸戦争を正当な戦争と評価した理由はどこにあったのであろうか。

この問いに対する答えは、おそらく英国の世論ではない。2003年、イラクへの侵攻前には意見の深い対立があったにもかかわらず、英国軍が参戦すると国民は国旗のもとに結集した。この爆発的な支持は長くは続かず、戦争の長期化と英国軍の死傷者数の増大に伴って消失した。第一次湾岸戦争の場合、1991年の始め、すなわち「砂漠の嵐」作戦 (Operation Desert Storm) においてイラクへの戦略爆撃が行われていた時期に世論調査が行われた。この世論調査では、戦争への支持率は80%であった。しかし、クウェート解放を目指す戦闘で英国軍に死傷者が発生したらどう思うかと尋ねると、支持率は60%に低下した<sup>1</sup>。この支持率の低下は、第一次から第二次の湾岸戦争を通して、武力行使に対する英国国民の態度の根底に連続性があることを示唆している。両戦争への英国国民の支持には、短期戦で死傷者がほぼ出ないという条件が付いていたのである。

この点に関して、第一次湾岸戦争は英国国民の支持を得る条件を満たしていた。そこには、第二次湾岸戦争にはない条件、すなわち戦争の目的が明確であり、短期間に決定的な戦果を収めることが見込まれ、そして、法的及び倫理的に正当な武力行使であるという評価が全てそろっていた。これらの評価は、戦争の結果によって補強されたが、第一次湾岸戦争終結から現在までの30年間に得た事後的な知見の蓄積に基づいていない。こうした評価は、ほとんど戦争終結直後に確定したのである。1991年3月14日、『タイムズ』紙の

---

<sup>1</sup> Stephen Badsey, "The Media War," in John Pimlott and Stephen Badsey, *The Gulf War Assessed* (London: Arms and Armour Press, 1992), p. 221.

防衛問題担当記者マイケル・エヴァンズ (Michael Evans) は第一次湾岸戦争の総括を行った。この記事の見出しは、ロバート・サウジー (Robert Southey) の反戦詩「ブレンハイムの後で (After Blenheim)」(1796年作) に登場する老カスパー (Old Kaspar) の言葉を暗に否定するものだった (訳注: 圧倒的な勝利の影に無数の犠牲がある、と老人が孫に語り聞かせる内容の詩)。記事には「実に圧倒的な勝利」とだけ書かれていた。

1990年、戦争が長期的な影響をもたらすのではないかと国民は消極的な立場をとっていたにもかかわらず、英国は次の四つの理由から戦争のリスクを受け入れる準備ができていた。第一の理由は、1982年のフォークランド紛争の影響であり、第二はマーガレット・サッチャーが首相の座にあったこと、第三は戦争準備において国際連合が中心的な役割を果たしたこと、そして、第四は欧州における冷戦終結によって英国の安全保障に対する喫緊かつ直接的な脅威が無くなったことであった。

1982年のアルゼンチンによるフォークランド諸島の占領は、実際に戦争を戦うことよりもむしろ抑止という手段に馴染んでいた英国及び英国政府に衝撃を与えた。南に向かった任務部隊に対する世論は真っ二つに割れた。英国の原子力潜水艦コンカラー (HMS Conqueror) がアルゼンチンの巡洋艦ベルグラノ (Belgrano) を撃沈し、排除水域 (the exclusion zone) の外側で多くの死者を出した後には、政府への支持率が低下した<sup>2</sup>。しかしながら、最終的には、フォークランド紛争は英国国民を国旗のもとに結集させた。その結果として、1982年以降、英国は、軍事力を用いて政治的成果を達成することが未だ可能であると認識した。さらに大きく見ると、英国及び NATO 同盟国はともに、抑止力が信頼できるのは戦争という手段が選択可能な選択肢となっている場合に限られることを理解した。

1982年当時首相であったマーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) は、1990年の時点においても未だ首相の座にあった。一般的に、フォークランド紛争の勝利はサッチャーの政治生命を救ったと言われている。この言説は、おそらく誇張である。フォークランド紛争前から保守党復活の兆しは明らかだった。しかし、サッチャー自身を含む多くの者がこの言説を信じた。1982年以降、国内外で彼女の評判が急激に高まった。「鉄の女」と呼称されたサッチャーは、冷戦下でソ連に立ち向かう民主主義国家の決意を体現する存在となった。あわせて彼女は、米国の寛容さと積極的な協力が無かったら、1982年の勝利を獲得できなかったことを十分に承知していた。このため彼女は、米国のロナルド・レーガン (Ronald Reagan) 大統領と強固な個人的関係を築いた。他方、冷戦の終結に対してサッチャーは不安を抱いた。その理由は二つあった。第一は、欧州で統一を果たしたドイ

<sup>2</sup> G.M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (Basingstoke: Macmillan, 1989), pp. 116, 125-9.

ツへの警戒であった。第二は、レーガンの後任であるジョージ・H・W・ブッシュ (George H. W. Bush) 大統領が、対欧州政策の実行にあたり、英国ではなくドイツを重視するのではないかという懸念であった。

イラクのクウェート占領が報じられた1990年8月2日、偶然にもサッチャーは駐米英国大使と共に米国に滞在していた。彼女は、アспен (Aspen) で開催される国際会議に出席する予定であった。彼女は、ブッシュ大統領との強固な関係を築くチャンスをイラクが与えてくれたと判断した。すぐさま彼女は、他の同盟国、中でも特にフランスの説得に回った。その日の夜、サッチャーはアспенでブッシュ大統領と並んで会見を行った。二人は、この時すでに、イラクによる侵攻に対して軍事力を行使する必要があると考えていた。湾岸危機が進行する中でブッシュに決意を固めさせたのはサッチャーの功績である、という見解もある。サッチャーの外交担当補佐官を務めたチャールズ・パウエル (Charles Powell) は、後に1990年後半の英米関係について「英国政府高官は、事実上、ブッシュ政権の一員として扱われた」と結論付けた。ストライク・コマンド (Strike Command) の司令官にして、後に「グランビー」作戦 (Operation Granby) (湾岸戦争の中で英国軍が実施した作戦) で総司令官を務めたサー・パトリック・ハイン (Patrick Hine) 空軍大將は、10月9日、米国防省で統合参謀本部議長コリン・パウエル (Colin Powell) 大將と会談した。この際、ハインは、パウエルが武力の行使に消極的なことに驚いた。パウエルは、効果が出るまで1年、場合によっては2年かかる経済制裁を行うことを覚悟していた。一方、ハインは、気候が比較的涼しいことを理由に、その冬に開戦したいと考えていた<sup>3</sup>。

8月5日、英国に帰国する前、サッチャーはアспенの聴衆に対して「もしイラクに成功を許せば、いかなる小国も二度と安全だと思えなくなる。弱肉強食の掟が法の支配に取って代わるだろう」<sup>4</sup>と語った。サッチャーは、イラクによる侵攻を1939年のナチスによる侵攻に例えた。トニー・ブレア (Tony Blair) も、2002～2003年にこの例えを引き合いに出した<sup>5</sup>。西側にとって湾岸地域の石油が重要であるという事実もサッチャーの念頭にあったが、彼女の公式声明は、こうした原則的な課題を改めて確認し、世界秩序における国連の重要性を強調する内容であった。サッチャーの信念は報われた。安全保障理事会は、イラクに対抗する軍事同盟の結成及び最終的な開戦の決定と足並みをそろえながら、一連の決議を可決した。その皮切りとなった、8月2日に採択された国連安保理決議660は、イ

3 Michael R. Gordon and Bernard E. Trainor, *The Generals' War: The Inside Story of the Conflict in the Gulf* (Boston: Little Brown), p. 130.

4 Lawrence Freedman and Efraim Karsh, *The Gulf Conflict 1990-1991: Diplomacy and War in the New World Order* (London: Faber, 1993), p. 111; see also pp. 3, 74-6.

5 Gordon and Trainor, *The Generals' War*, p. 36.

ラクに対してクウェートからの無条件撤退を求めた。4日後に採択された決議661はイラクに対する経済制裁を容認し、さらに8月25日の決議665はイラクに海上封鎖を課した。そして、11月25日に採択された国連安保理決議678は、クウェート解放のための武力行使を容認した。これらの対応では米国が先導的な役割を担ったものの、米国は単独で行動したわけではなかった。中でも特に米国の立場を正当化したのは、中東諸国の中に米国を支持する国が存在したことであった。侵攻によってアラブ連盟は分裂した。イラクがクウェート市以外の都市にも進軍したため、イラクの野心がクウェートのみに止まらないのではないかと懸念する国もあった。サウジアラビアは、当初は事態を静観すると思われたが、8月6日以降は湾岸諸国やエジプトを含む地域同盟の盟主となった。この時重要であったのは、2002年から2003年までの事態の推移とは対照的に、危機が自国本位な西側諸国の反応だけではなく、自国の防衛を案じる中東諸国の連帯を招く結果になったという点であった。石油に対する資本主義陣営の懸念は、侵略行為に対する原則的な対応と一致したのである。

欧州で冷戦が終結していなければ、おそらくこれらのすべては不可能であった。過去40年以上において初めて、英米仏は、欧州大陸の防衛を世界のその他の地域の安全保障よりも優先せずに済んだのだ。ソ連はまだ存在していたものの、ゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev) 大統領は最終的には、1990年9月9日にヘルシンキで達成された合意に従い、米国と共にイラクに対してクウェートからの即時撤退を要求する用意があった。1968年、英国は欧州防衛に集中した方が良いと判断して、スエズ以東から部隊を引き揚げることが決断した。だが今や英国は、冷戦終結により、リスクを犯すことなく西欧から部隊を派遣することができた。「英国にとって(中略) スエズ以東への干渉は自転車に乗るようなものだ。コツを忘れることは決してない」<sup>6</sup>というある記者のコメントには、一種ののんきさが表れていた。

## 作戦の設計

1982年に任務部隊がフォークランド諸島に派遣された。しかし、当時の英国は、NATO への貢献と欧州防衛に対するコミットメントに専念するため、大英帝国（訳注：海外領土や植民地を維持し、英国の世界的影響力を保ち続けようとする試み）と決別していたように見えた。世界的な海洋大国としての地位を優先するのか、それとも自国及び周辺地域の安全保障を優先するのかという長年の論争は、後者が勝利する形で決着していたのである。『エコノミスト』誌はフォークランド紛争を「帝国の逆襲」と評したものの、この紛

<sup>6</sup> John Sullivan in *Independent on Sunday*, 2 September 1990, cited in Freedman and Karsh, *The Gulf Conflict*, p. 111.

争は、英国の国防論における大陸重視の流れを根本から否定することには繋がらなかった。1980年代を通して、英国陸軍と王立空軍は、通常戦力による東西ドイツ国境の防衛強化に集中した。

1980年代の英国陸軍は、サー・ナイジェル・バグナル (Nigel Bagnall) 大将がもたらした知的影響に支配されていた。バグナルは、1980年から1983年まで在ドイツ英国陸軍第1軍団長を、1983年から1985年までは英国陸軍ライン軍団長を、そして、1985年からは NATO 北部軍集団 (NORTHAG) 司令官を務めた。その後、彼は1985年には陸軍参謀総長に就任し、1988年まで同職を務めた。バグナルは、1972年から1973年までの間、オックスフォード大学ペリオール・カレッジの防衛特別研究員の地位を与えられ、そこで1973年の第四次中東戦争に関する論文を執筆した。この戦争から得られた軍事的な教訓は、欧州における防衛作戦の遂行に対する NATO の基本的考え方、ならびに1970年代後半から1980年代における英国の職業軍人教育に対して大きな影響を与えた<sup>7</sup>。

バグナルの思想を形成したのは、ドイツ連邦軍と共に勤務した経験であった。彼の思想は、米国陸軍のそれと傾向は似ていたが、米国陸軍とは異なる起源を持っていた。米国陸軍は、ベトナム戦争後、反乱鎮圧作戦を犠牲にして「大規模」戦争への対応に集中した。同時に米国陸軍は、欧州防衛が消耗戦に陥ることを回避するための解決策として、機動戦を重視した。英国陸軍はベトナムのトラウマを免れたものの、米国陸軍と同様、対反乱戦の理論や植民地からの撤退作戦で得た教訓に背を向けた。参謀大学やサンドハースト王立陸軍士官学校では、その将校や士官候補生に対して、ドイツが第二次世界大戦中に東部戦線やノルマンディで遂行した防衛作戦に関する講義が行われた。「グッドウッド」作戦 (Operation Goodwood) (訳注：ノルマンディ上陸作戦後、英国第2軍がカーン (Caen) 郊外でドイツ軍の抵抗を排除するために実施した戦車戦) に関する現地研修が繰り返し実施された。バグナル、ならびに彼と同年代の将校は、共に軍務に就いたドイツ連邦軍の將軍たちと親交を深め、かつ彼らから影響を受けた。ドイツ連邦軍の將軍の中には、著名な人物としてはフェルディナント・フォン・ゼンガー・ウント・エッターリン (Ferdinand von Senger und Etterlin) など、ドイツ国防軍で戦った経験を持つ者もいた。

バグナルらは、ソ連の攻撃から東西ドイツ国境を防衛する最良の方法は、戦術レベルではなく作戦レベルで実行される機動戦と反撃を中心とした戦い方であり、前方防衛と火力

<sup>7</sup> その後の展開については以下を参照。John Kiszely, "The British Army and Thinking about the Operational Level," in Jonathan Bailey, Richard Iron and Hew Strachan, eds., *British General's in Blair's Wars* (Farnham: Ashgate, 2013); Colin McInnes, *Hot War, Cold War: The British Army's Way in Warfare 1945-1995* (London: Brassey's, 1996), pp. 60-75. 湾岸戦争前夜の英国陸軍については以下を参照。Antony Beevor, *Inside the British Army* (London: Chatto and Windus, 1990).

を戦い方の中心としてはならない、と結論付けた。すなわち、その内容は、防衛は攻撃的に行わなければならない、敵領内の奥深くを標的として空爆と通常型ミサイルにより敵の補給部隊と後方連絡線を攻撃しなければならない、というものであった。バグナルは「ジンジャー派 (Ginger group)」を結成した。バグナルの髪の色が赤褐色<sup>ジンジャー</sup>であったことに加えて、英語で「to ginger」という言葉には刺激を与え、かつ挑発するという意味があるからである。1986年、英国国防省による試算は、軍団の反撃により「NATOは、敵を足止めするだけではなく、敵を撃破する可能性を大幅に高めることができる」と記載した<sup>8</sup>。1988年、キャンバリーの陸軍参謀大学に高等指揮参謀課程 (Higher Command and Staff Course) が開設された。この課程において重視されたのは、戦争の作戦レベル (the operational level of war)、ならびに軍団級の部隊指揮であり、課程の目標はソ連の攻撃に対する最良の反撃方法を検討することであった。初代課程長 (director) は、北アイルランドでの勇敢な行動により勲章を受けた、パラシュート連隊出身のルパート・スミス (Rupert Smith) 准将だった。彼は、「型破りな発想」ができる点、直観に反する挑戦的な質問を投げかけて生徒を「活気づける」ことができる点、ならびに問題を適切に理解することこそが正しい答えに到達する上で欠かせない最初の一步であることを知っている点において特に優れていた。同じ校舎の上の階では、新設された陸軍ドクトリン開発局が陸軍初のドクトリンとなる『軍事作戦の設計 (Design for Military Operations)』の編纂を開始した。このドクトリンは、ティム・グランビル＝チャップマン (Tim Granville-Chapman) 中佐 (王立砲兵隊将校で、国防参謀次長としてキャリアを終えた人物) により起案され、1989年に発表された。

## 展開

カーター大統領が1980年に設立した緊急展開統合任務部隊 (Rapid Deployment Joint Task Force) は、1983年に米国中央軍 (US Central Command) に再編された。この当時、米国、ならびに英国を含む NATO 同盟国は、ソ連が最終的にはペルシャ湾岸及び同地域の石油を狙って、コーカサス経由でイラン北部に侵入することを警戒していた。冷戦の終結を受けて中央軍は、ソ連以外の脅威に注意を払うようになり、1990年7月にはイラクとの紛争を想定した軍事演習を行った。8月までに米国は、中東における紛争のための指揮系統を整備し、あわせてその計画を担当する将校を配置した。しかし、大規模戦争を戦う場合に必要となる人数は配置されていなかった。湾岸地域での緊張が高まった期間、すなわち8月のイラクによるクウェート侵攻から1991年1月の作戦開始までの期間

<sup>8</sup> Stephen Badsey, "The Doctrine of the Coalition Forces," in Pimlott and Badsey, *Gulf War Assessed*, p. 75.

は、国連のマンデートに基づき国際社会が結束するための政治的駆け引きを行うことだけでなく、戦域内の戦力を増強することを可能にしたのであった。

米国は1991年2月までに53万人の兵員を湾岸に展開し、多国籍軍の総兵力は75万人に達する予定であった。そのうち45,000人が英国軍であったが、英国はこれらの兵員と装備のほとんどすべてを、ドイツから輸送しなければならなかった。英国の海運業界は、二度の世界大戦中に英国の戦略を支えた当時の姿には及びもつかなかった。海運業界は、この種の大規模な兵力輸送に必要なトン数をもはや所有していなかった。あわせて英国国防省は、海外派兵のための動員計画を一切準備していなかった。したがって英国は、かなりの程度、バルチック海運取引所でチャーターした外国船舶に依存した。この他、国防省は、1956年のスエズ作戦（訳注：第二次中東戦争を指す）で得た教訓を忘却していた。そのため、作戦目的に応じた順序で物資を陸揚げできるような船積み、すなわち軍事的必要性に従った船舶への積載は実施されなかった。むしろ優先されたのは、商業的な原則であった。つまり、いつ、どのような順序で何が必要となるのかという点はまったく考慮されず、代わって、できる限り少ない船舶に極力多くの貨物を積むことが目的となったのである<sup>9</sup>。

8～9月の間に、部隊全体の海上輸送に対する需要が倍増した。全体で見ると、必要な物資の90%が海路で運ばれた。部隊が到着したらすぐに食料や装備を供給できるようにするため、物資の大半は部隊の現地到着に先立ち戦域に届いていなければならなかった。部隊自体は、主に空路で後から到着することになっていた<sup>10</sup>。この結果、一時的ではあったが、重大な脆弱性が発生した。戦闘部隊より先に物資が届くため、物資がイラクの先制攻撃に晒されるおそれが生じたのである。この当時は湾岸危機の初期段階であり、イラク軍による侵攻を阻止する戦力はエア・パワーであったが、他方で、地上部隊が必要であった。地上部隊がいれば、船舶の調達や物資の確保に必要な時間をさらに稼ぐことができる、と考えられた。物資より先に戦闘部隊を到着させた場合に想定されるデメリットは、全ての装備がまだ到着しない間に、もしくは仮に到着していても装備品の操作に習熟していない間に戦闘部隊が展開しなければならなくなることであった。

英国は、速やかに戦域に展開できる、空路輸送が可能な軽師団を保有していなかった。英国は1988年に第24空中機動旅団を創設しており、同旅団を第5空挺旅団（2個パラシュート大隊とグルカ人部隊で構成）と第3コマンド旅団（王立海兵隊）で補強すること

<sup>9</sup> McInnes, *Hot War, Cold War*, p. 87.

<sup>10</sup> Jeffrey McCausland, *The Gulf Conflict: A Military Analysis* (Adelphi Paper 282, International Institute for Strategic Studies, London, November 1992), pp. 10-11.



もできた<sup>11</sup>。しかし、これらの部隊は湾岸地域に派遣されなかった。米国が戦車の増強を求めたため、英国は装甲師団を派遣することになったのである。装甲師団の派遣に先立ち9月には、高等指揮参謀課程の優等生であったパトリック・コーディングリー (Patrick Cordingley) 准将が指揮する第7装甲旅団が派遣された。英国軍の部隊が増派されるに従って、コーディングリーの指揮下に入る兵員は増加し、最終的には12,000人近くに達した。これは旅団というよりもむしろ、師団に近い兵力であった。11月、ルパート・スミスが指揮する第1装甲師団の師団司令部が到着した。師団司令部と共に第4装甲旅団が到着したが、この名称はいささか誤解を招くものだった。第7装甲旅団が2個戦車連隊及び1個機械化歩兵大隊を擁したのに対して、第4装甲旅団は1個戦車連隊と2個機械化歩兵大隊を保有していた。したがって、第4装甲旅団は、正確には装甲部隊というよりもむしろ、機械化部隊であった。招集された師団全体を合わせると33,000人の兵力となり、1個旅団が不足しているとはいえ（通常の編成では師団は3個旅団から成る）、大規模な師団であった。このように師団の規模が大きくなった理由は二つあった。第一は、湾岸地域での作戦が元来想定していたドイツでの作戦よりも長距離の作戦であり、大量の補給所要に対応するために補給部隊を増強したためであった。第二は、師団自体が傘下に統合工兵部隊、砲兵部隊及び偵察連隊を擁していたためであった。

米国は英国に戦車の展開を求めたが、米軍関係者は英国軍の新型主力戦車チャレンジャーの性能を不安視していた。同様の不安を感じていた英国軍関係者も少なくなかった。その他の重戦車と同様、チャレンジャーには出力重量比の問題があった。チャレンジャーは欧州での使用を想定した戦車であり、その火炮と装甲は優れていた。しかし、砂漠の熱と砂塵の中でのエンジンの稼働には懸念があった<sup>12</sup>。この懸念を解消するため、ドイツに残留する装甲連隊の戦車から部品が取り外され、これらは戦域に派遣される戦車のための整備用部品となった。第4王立戦車連隊の偵察部隊が保有する8台の軽戦車スコープオンはすべて走行不能となり、同連隊のチーフテン戦車（チャレンジャー以前の主力戦車）の部品も取り外された<sup>13</sup>。第14及び第20軽騎兵連隊が第4装甲旅団への編入と中東への派遣を命じられた時、実際に運用できる戦車はわずか1台しか残っていなかった。この理由は、第7装甲旅団に提供するために部品が接収されていたためであった<sup>14</sup>。懸念を生じさ

11 Badsey, "Doctrine of the Coalition Forces," pp. 74-5.

12 Peter de la Billière, *Storm Command: A Personal Account of the Gulf War* (London: Harper Collins, 1992), pp. 177, 264-5.

13 Stuart Crawford, *Sending My Laundry Forward: A Staff Officer's Account of the First Gulf War* (Kibworth Beauchamp: Matador, 2014), pp. 7-8.

14 McInnes, *Hot War, Cold War*, p. 88.

せる最大の原因は、チャレンジャーのパワーパックにあった。その部品の中には、5キロ走行するたびに故障すると予想されたものがあった。結果的に故障が起きる頻度は平均6～8キロごとであり、合計211台のチャレンジャーに対して279個のパワーパックが交換された。地上戦が短期間だったことが幸いして、チャレンジャーの整備はなんとか持ちこたえた。第7装甲旅団では、4日間連続して進軍した後においても、117台の戦車のうち104台は引き続き戦闘が可能な状態であった<sup>15</sup>。加えて、油圧エンジンへの水の供給が維持される限り、ほとんどの車両にとって問題となるのは、熱ではなく砂塵であることが判明した。あらゆる場所に砂ぼこりが入り込み、搭乗員がエンジンの整備に苦闘する中で潤滑油の消費量が急激に増加した。

戦争前から作戦指揮の原則に対して注意が払われており、スミス本人も彼の部下たちも、師団をどのように指揮するかに関してかなり明確な考えを持っていた。しかし、師団より上位の指揮命令系統は満足できるものではなかった。中東における英国軍全体の司令官は、歩兵科からSAS（特殊空挺部隊）の将校となった経歴を持ち、かつ退役を間近に控えたサー・ピーター・デ・ラ・ビリエール（Peter de la Billière）大将であった。彼には参謀の選任に関する発言権が与えられていなかった。参謀の任命は場当たり的に行われ、さらには、今回の戦闘に一役買いたいと考える、第1師団に参加していない連隊の思惑に左右されることが少なくなかった。1990年7月25日、英国政府は、冷戦終結に伴う国防見直し報告書『変化の選択肢（Options for Change）』を発表した。この報告書の中に陸軍の削減と再編が謳われていた結果、各連隊は自らの存続を訴えるために名前を売ろうとしたのである。リヤドに位置する中東英国軍司令部（Headquarters British Forces Middle East）は、このような内向きの願望を叶える手段としては、いささか中途半端であった。中東英国軍司令部は単一軍種で構成された司令部ではなく、その責任範囲は陸海空の三軍に及んでいた。こうした任務を遂行した前例はほとんど無く、実際に戦闘が開始されるまで中東英国軍司令部は機能しなかった<sup>16</sup>。

デ・ラ・ビリエールは、二つのレベルで摩擦に直面した。その第一は、ロンドンの国防省との摩擦であった。彼は、戦術レベルに至るまで軍内部の指揮命令系統に干渉するトム・キング（Tom King）国防大臣の態度に腹を立てた。デ・ラ・ビリエールは、キングはマスコミを過剰に気にしていると批判した。あわせてデ・ラ・ビリエールは、交戦規程などの間

<sup>15</sup> Patrick Cordingley, "The Gulf War: Operating with Allies," *Journal of the Royal United Services Institute for Defence Studies*, April 1991, p. 20.

<sup>16</sup> De la Billière, *Storm Command*, pp. 57-8, 62; 司令部の機能に関する説明については以下を参照。Crawford, *Sending My Laundry Forward*, esp pp. 73-84.

題に対する政治的統制が厳しすぎると感じた<sup>17</sup>。戦域で敵と対峙したすべての英国軍人と同様、デ・ラ・ビリエールが英国本土で起こっていた政治的危機の深刻さを理解することは困難であった。マーガレット・サッチャー率いる保守党は苦境に立たされていた。英国本国では、ともに元国防参謀総長であるルウィン（Terence Lewin）卿とブラモール（Edwin Bramall）卿が、戦争の最中の首相交代などあり得ないと喧伝していた<sup>18</sup>。しかし、二人の抗議もむなしく、1990年11月末にサッチャーは退陣し、代わってジョン・メイジャー（John Major）が首相に就任した。このような英国本土と戦域の分断が英国軍の士気に影響する可能性があったが、メイジャー首相は1991年1月に中東を訪問してデ・ラ・ビリエールとミス両人に好印象を与えることにより、この問題を解決した。

デ・ラ・ビリエールが直面したもう一つの摩擦は、米国中央軍司令官のノーマン・シュワルツコフ（Norman Schwarzkopf）大将との関係であった。デ・ラ・ビリエールは、シュワルツコフの配下に置かれていた。軍レベルの英米関係は、政治レベルほど緊密ではなかった。デ・ラ・ビリエールは、シュワルツコフから十分に信用されていないと感じた。米軍関係者の抱く英国軍への疑念を強めたのは、ハインの軍事補佐官であり、かつ「グランビー」作戦のすべてに責任を負っていた人物が、作戦計画を保存していたコンピュータを自分の車に置き忘れ、このコンピュータが盗まれたという事件であった。英国軍は当初、紛失の事実を隠蔽しようとしたが、最終的に情報を漏えいすることなくコンピュータは無事に回収された。しかし、一連の機密保持違反と事件発生後の報告の遅れにより、英国軍と米軍の信頼関係はほとんど構築されなかった。

12月中旬にこの事件が発生したことが、おそらく英国第1装甲師団、ならびに作戦において同師団が果たす役割に大きな影響を及ぼした。第7装甲旅団は、戦域に到着した当初、イラクの攻撃を防ぐという名目でサウジアラビアに基地を構えていたが、11月からはクウェート解放を準備した。米国第1海兵師団の隷下で反撃に任ずる部隊となった第7装甲旅団は、ペルシャ湾に近い東側の地域に配置された。コーティングリーは、戦車を指揮して占領されたクウェートに進軍する作戦になると予想した。しかし、シュワルツコフの計画は、クウェートの解放よりも、イラク軍を戦場で撃破することを優先していた。右翼の部隊の役割は、敵の漸減を目的とする防勢的な戦いをイラク軍に強要し、これをその場に足止めすることであった。他方、シュワルツコフは、左翼の部隊を増強し、この部隊によって砂漠越しにイラク軍の右側面に強烈な一撃を加えて包囲する計画を立てた。その目的は、イラク本国との間の後方連絡線を遮断することであった。この左翼の作戦は、紙の上では簡

<sup>17</sup> De la Billière, *Storm Command*, pp. 77-8, 179, 320; Peter de la Billière, *Looking for Trouble: An Autobiography - from the SAS to the Gulf* (London: Harper Collins, 1994), p. 400.

<sup>18</sup> *The Times*, 14 January 1991.

潔で古典的な機動戦であったが、距離と地形のために燃料だけでなく水に関しても、膨大な兵站支援を必要とした。また、犠牲者の増加に伴って水への需要が急激に増加することが予想された。

デ・ラ・ビリエールは、第7装甲旅団を含む英国第1装甲師団を、右翼ではなく左翼で、すなわち砂漠側での大規模な突進に使いたいと考えていた。この意向の背景には、三つの理由があった。その第一は、米国陸軍とは異なり米国海兵隊は NATO の作戦規定を使用していないため、米国海兵隊と英国軍の間で混乱が起きる可能性があることであった。第二は、米国海兵隊に与えられた任務の性質が原因となって、英国軍に不必要な死傷者が発生するのではないかと懸念であった。米国海兵隊の任務は、基本的にはイラク軍をその場に足止めすることであり、作戦全体の中で見ると主要な作戦（訳注：左翼からの包囲作戦）に従属していた。英国軍から死者が出るのであれば、その損失をできる限り抑え込みたい、あわせて主要な作戦の一端を担う中で殉職したという形にしたい、とデ・ラ・ビリエールは考えた。第三は、英国の軍事的貢献から最大の政治的効果を引き出そうという、デ・ラ・ビリエールの決意であった。彼は、同盟国である米国に強烈な印象を残し、同時に懸案となっている英国陸軍再編問題が陸軍にとって有利な方向に進むような結果を獲得することを狙った。

11月27日、デ・ラ・ビリエールは、戦域に到着したルパート・スミスの前で自身の考えをパトリック・コーティングリーに説明した。スミスは、デ・ラ・ビリエールの意図を密かに打ち明けられていた。コーティングリーは良い顔をしなかった。増強された第7装甲旅団は1日100万リットルの水を消費しており、その消費量をさらに増大させる砂漠の中で師団全体に水を補給できる方法など、彼には見当もつかなかった。最終的には、兵站の専門家が増員され、あわせてスミスが利用可能な井戸を確保しながら師団を進軍させる計画を作成することになった。しかし、コーティングリーは、給水問題の他にも懸念を抱いていた。「師団として訓練を行った経験がない寄せ集めの部隊」である英国第1装甲師団は、米国の軍団と歩調を合わせた効果的な作戦行動をとれるのだろうか。コーティングリーは、「機動戦」の計画が作成されだろうと予測した。しかし、英国第1装甲師団が米軍と共同で「機動戦」を訓練したことは、それまで一度もなかった。他方、コーティングリー率いる第7装甲旅団は、米国海兵隊と訓練した経験を有しており、米国海兵隊を信頼していた。加えて、米国海兵師団と協力する作戦は、危険性が高いかもしれないが、戦術的には比較的容易となる見込みであった<sup>19</sup>。

<sup>19</sup> Patrick Cordingley, *In the Eye of the Storm: Commanding the Desert Rats in the Gulf War* (London: Hodder and Stoughton, 1996), p. 107.

シュワルツコフも、コーディングリーと同じ疑念を抱いていた。中央軍司令官のシュワルツコフは、チャレンジャー戦車の機械的な信頼性に対して同様の不安を抱き、かつ右翼から左翼に部隊配置を変更する手間にも不満を抱いた。その上、米国海兵隊は過去に共に訓練した経験がある第7装甲旅団を手放そうとしなかった<sup>20</sup>。左翼への移動開始を、イラク軍の監視の目から隠れて移動できる時期、すなわち空爆が開始される1月中旬まで待たねばならないという事実によって、左翼への配備変更を行うことの軍事的必要性が一層低下した。英国第1装甲師団は、より安全に配備変更を行うため、師団全体がまとまって移動するのではなく、隷下部隊のそれぞれが逐次に移動することになった。そのため、戦力を十分に発揮できない時期が諸処で生じることが予想された。これらの疑念にもかかわらず、デ・ラ・ビリエールは持論を押し通した。英国第1装甲師団は右翼から左翼に移動し、米国陸軍第7軍団の隷下に置かれた。このようにして、同師団は、機動戦で勇猛ぶりを発揮し、英国政府に対して陸軍の必要性を示し、そして同盟国である米国と共に作戦を遂行できることを証明する機会を獲得したのである。

ルパート・スミスは、軍事上の懸案事項に対して敏感であった。彼は、第1装甲師団を訓練不足と評価していた（これは、元々、スミスが英国陸軍ライン軍団 (British Army on the Rhine) 及びソ連からの攻撃に対する同軍団の即応性に対して与えた評価）。彼は、左翼への配備変更によって、師団を訓練する時間が増加したと判断した。スミスは、配下の指揮官たちの自主的判断能力を開発するための時間も確保したいと考えた。各指揮官による主体的な判断を重視するという考え方は、高等指揮参謀課程が広めた理念に基づいていた。地上戦開始直前の数日間、英国第1装甲師団は48時間の演習を2回行ったが、砲兵隊の射撃や近接航空支援に関しては、未だ十分に訓練されたとは言えない状態であった<sup>21</sup>。

## 作戦

英米が編み出した作戦モデルは、「エアランド・バトル」と呼ばれた。これは、エア・パワーの支援のもとで機動を行うとともに、敵陣の奥深くを目標とする航空攻撃によって敵の反撃能力を無効化する戦い方であった。結果的に湾岸戦争の遂行においては、エアランド・バトルが構想していた陸上戦力と航空戦力の連携は実現しなかった。むしろ、これらの戦力は、分離した二つの段階のそれぞれにおいて、独立した形で運用された。すなわち、

<sup>20</sup> Norman Schwarzkopf, *It Doesn't Take a Hero* (New York: Bantam, 1992), pp. 455-65.

<sup>21</sup> Rupert Smith, "The Gulf War: The Land Battle," *Journal of the Royal United Services Institute for Defence Studies*, February 1991, vol 137, no 1, pp. 1-5.

第一段階の「砂漠の嵐」作戦は航空戦力による戦いとなり、第二段階の「砂漠の剣」作戦 (Operation Desert Sabre) は陸上戦力による戦いとなった。

「砂漠の嵐」作戦は、対立する二つの目標、すなわちイラク軍を上空から撃破するという目標と、敵の指導者を排除すると同時にその指揮系統を破壊して、統制の取れた組織的行動ができない状態に陥らせるという目標を折衷させた作戦計画であった。従来の考え方は、シュワルツコフが遂行する地上戦と足並みをそろえながら、エア・パワーによりイラク陸軍を戦力としての体を成さない程度にまで殲滅する、というものであった。コリン・パウエルを始めとする多くの米軍関係者がこの考え方を支持した。ジョン・ワーデン (John Warden) 大佐が1988年に初めて発表した航空作戦のコンセプトは、国家を五つの同心円として捉えるものだった。一番内側の円は国家の指導者層であり、野戦軍は一番外側にいる5番目の円であった。ワーデンは、イラク軍の機動力ではなく、サダム・フセインとバース党 (the Baathists) の統治能力を攻撃したいと考えた。彼は、身体に命令を出す頭脳を取り除くことにより地上戦を避けることができると主張した。この例えは、第一次世界大戦の末期に J・F・C・フラー (J.F.C. Fuller) や機甲戦の提唱者らが用いた比喻と似通っていた。速度と機動力に優れた戦車が敵の防衛線を突破し、敵の司令部を攻撃する。これによって敵部隊の舵取りを行う指揮官を取り除き、敵部隊のすべては組織的に行動できない状態となる。このようにフラーたちは主張した。1918年の時点においてはその攻撃目標は作戦的なものであったが、1991年では攻撃目標は戦略的、かつ社会的なものであった。

「砂漠の嵐」作戦が直面した問題は、正確な情報の不足であった。イラク軍が無線封止を貫いたため、信号情報 (シグイント) を得られる機会は限りなく少なかった。おそらくこれ以上に深刻だったのは、最新の人的情報 (ヒューミント) の欠落であった。サダム・フセインを中心に据えた同心円状の力の輪としてイラクを捉えるワーデンのコンセプトは、イラクという国家の構造を読み違えており、かつそれぞれの部族や一族が持つ力を過小評価していた<sup>22</sup>。

人的情報の不足が契機となり、デ・ラ・ビリエールは SAS に新たな役割を与えた。中東で特殊部隊の作戦に携わった経験が豊富なデ・ラ・ビリエールは、英国が欧州大陸へのコミットメントに専念しているために、SAS が砂漠での戦いに関する専門的能力を喪失してしまうのではないかと懸念していた。シュワルツコフは SAS をイラク領内に潜入させて情報収集を実施させることに否定的であり、空からの偵察で同じ機能を果たせると主張した。し

22 必読書として以下を参照。John Andreas Olsen, *Strategic Air Power in Desert Storm* (London: Frank Cass, 2003). また以下も参照。John A. Warden III, *The Air Campaign: Planning for Combat* (New York: Pergamon-Brassey's, 1989), and John Andreas Olsen, *John Warden and the Renaissance of American Air Power* (Washington DC: Potomac, 2007).

かし最終的には、またしてもデ・ラ・ビリエールは持論を押し通した。「砂漠の嵐」作戦が開始されると、SASは国境を越えてイラク領内に潜入した。SASは、英国政府上層部における政治的情報の不足を解消することはできなかった。しかし、SASは、イラク軍の展開位置や水の補給に関する情報を伝え、戦争の後半でイラクがスカッドミサイルでイスラエルを狙った際には早期警告を発した<sup>23</sup>。

1991年1月16日から17日の夜に始まった「砂漠の嵐」作戦は、延べ43日間続いた。2,400機の戦闘機及び支援機が参加し、110,000回の出撃を行った。王立空軍の機数は全体の3.5%を占め、作戦出撃の4.8%を実行した。王立空軍は、損失率を2%（1967年におけるイスラエル空軍の損失率）から10%（第二次世界大戦における王立空軍爆撃機コマンドの損失率）と予想した。他方、米国空軍は、最悪の場合、損失率が20%になると予想していた。結果的に多国籍軍全体の損失は極めて軽微であった。6週間の作戦で損失したのは60機であり、出撃1回当たりの損失率は0.03%であった。しかし、英国空軍の損失は不釣り合いに大きかった。王立空軍はトーネード戦闘爆撃機12機を失った。このうち5機は、低空飛行の出撃によって失われた。1990年以前の王立空軍は北欧での作戦行動を想定しており、そのパイロットはソ連のレーダー網を回避するために低空飛行の訓練に励んだ。しかし、ペルシャ湾岸での課題は、地形と気候いずれの点でも異なっていた。王立空軍は、まだ初期段階ではあったが、航法システムや誘導システム、目標捕捉などのスマート技術を装備していた。デ・ラ・ビリエールは、湾岸戦争に参加するパイロットに15,000フィート以上の高高度での飛行を認めるよう働き掛けたが、冷戦時代の慣行に固執するハインと国防省から強い反対を受けた<sup>24</sup>。後にハインは、反対したことを否定した。

「砂漠の剣」作戦は1991年2月24日に始まった。この時まで、イラク軍の43個師団のうち25個師団が戦力の半分以上を失っていると評価されていた。1993年に刊行された『湾岸戦争エア・パワー調査 (Gulf War Air Power Survey)』は、エア・パワーの成果に関する誇張された主張を下方修正した。20世紀末までにエア・パワー理論は、エア・パワーによって敵軍の士気に影響を与えるためには物理的な影響を与えるよりも多くのことが必要になるという評価に回帰した。しかし、湾岸戦争当時の評価は、まったくこれらと異なっていた。地上戦は、あらゆる想定を裏切って僅か4日で終わった。地上戦においてイラク軍が瞬間に崩壊したという事実が、空からの攻撃によって決定的な成果を獲得できるという主張の証拠となったのである。

<sup>23</sup> De la Billière, *Storm Command*, pp. 191-4, 221, 225, 266-7.

<sup>24</sup> De la Billière, *Storm Command*, pp. 229, 274; R.A. Mason, "The Air War in the Gulf," *Survival*, vol 33, no 3 (May/June 1991), pp. 211-29; Gene I. Rochlin and Chris C. Demchak, "The Gulf War: Technological and Organizational Implications," *Survival*, vol 33, no 3 (May/June 1991), pp. 260-73.

1980年代に NATO 諸国が考案した作戦ドクトリンは、火力よりも作戦のテンポを、また消耗戦よりも機動戦を重視した。この考え方を実現するため、シュワルツコフは作戦においてスピードと欺騙を活用した。右翼では部隊の進軍を限定的なものにとどめて、クウェート市を防衛するイラク軍を引き付けた。そして、こうした中、左翼から大規模な一撃が放たれたのである。衛星航法システムは夜間においても進軍し続けることを可能にし、赤外線照準器と光学照準器は戦車の乗員が暗闇の中においても交戦することを可能にした。英国第1装甲師団は3日間で約300キロを走破した。しかし、この成功を、単に消耗戦に対する機動戦の勝利、あるいは防御に対する攻撃の勝利と見做すことは間違いであろう。このような評価は、戦争終結直後の時期に多く見ることができる。機動戦は、敵と交戦し相手を破壊する必要性を取り払わなかった。また、部隊の機動を可能にしたのは、火力であった。コーディングリーは、火力による敵の撃破を中心として計画された1942年10月23日のエル・アラメインの戦いにおいてモンゴメリー (Bernard Montgomery) 将軍が受けた以上の、砲兵隊による支援を自身が享受できたことを記録している。多連装ロケットシステム (MLRS) はイラク軍陣地の奥深くを攻撃する上で特に効果的であり、コーディングリーとスミスは共に、それぞれ表現は異なっていたが、砲兵隊が勝利にとって重要であるという事実を見落としていたことを認めた<sup>25</sup>。

ルパート・スミスは、機動と欺騙が重視されていたために大胆な運用も許されたのであろうが、慎重に第1装甲師団を運用した。スミスは、「私は現代の英国陸軍の運命を握っている。多くの時間が必要かもしれないが、左翼に配備変更する以外の選択肢は無い」と判断した<sup>26</sup>。彼は、自らの師団を陸軍削減の危機から救い出し、かつその成功を確実にするような方法で戦うことを望んだのである。同時に、スミスは、師団を勝利の場に立ち会わせることを望んだ。そのため彼は、長期に及ぶ戦闘を行った後においても師団が無傷の状態であるように、戦力を節約しながら慎重に師団を運用する作戦計画を立案した。彼の計画は、大規模な戦闘を数回行うものではなく、短期間の比較的小規模な戦闘を何度にもわたって戦うものであった。しかし100キロ進軍した時、スミスは戦う相手がもはや存在していないことに気づき、この戦場には想定していた縦深がないことを悟った。明確な攻撃目標が存在しない砂漠は、単に師団を機動させるための空間でしかなかった。スミスの作戦における重要な目標として残っていたのは、進軍のペースを維持するために必要な水を確保することだけであった。作戦開始から4日目の2月28日の午前8時、第1装甲師団がクウェート市北側のペルシャ湾方面に向かって東進する中で、多国籍軍に戦闘停止命令が発令された。

<sup>25</sup> Cordingley, *In the Eye of the Storm*, p. 2; Cordingley, "The Gulf War: Operating with Allies," p. 20; Smith, "The Gulf War: The Land Battle," p. 4.

<sup>26</sup> Smith, "The Gulf War: The Land Battle," p. 1.



## レガシー

1990年11月28日、コーディングリーは英国の報道陣に対して説明を行った。想定される損失について『ガーディアン』紙のデイビッド・フェアホール (David Fairhall) が質問すると、コーディングリーは次のように答えた。「我々がペルシャ湾で行う類いの戦争には多数の死傷者が伴うことを、英国国民は知っておくべきだ。この地で対峙している両軍の規模を考慮すると、これらの軍隊が衝突した場合、相当数の死傷者を出さずに済むことはあり得ない」<sup>27</sup>

すると記者は、死傷者数の予測について正確な数字を挙げて説明することを要求した。この当時、情報機関は、イラク軍の規模を実際よりもはるかに多く見積もっていた。このような報道陣からの質問は至極当然なものであった。シュワルツコフは、1991年1月15日の時点でイラク軍の兵力を54万人と推定していた。しかし、この1か月後、イラク軍の実際の兵力は約35万人であることが明らかになった<sup>28</sup>。コーディングリーのもとで旅団参謀長を務めたユアン・ルードン (Euan Loudon) 少佐は、第7装甲旅団の死傷率は全体で15%になるだろうと述べた。ある記者は「つまり、あなたの旅団だけで1,500人以上の死傷者が発生するということですね」と応じた。翌日、ロンドンの地方紙『イブニング・スタンダード』は、「多数の犠牲者に備えよ」と読者に警告した<sup>29</sup>。

コーディングリーは責任ある行動をとっていた。彼は、戦争の現実に対して心の準備をすることを、英国国民に促した。コーディングリー自身が算出した推定損失率は、ルードンの数字をはるかに超えていた。11月30日、『タイムズ』紙は、1日当たりの損失率は10%になるだろうというコーディングリーの発言を報じた。この1日当たり10%という損耗率は、数日続けば第7装甲旅団が全滅することを意味した。結果的には、英国軍の死傷者、あわせて多国籍軍全体の死傷者は著しく少なかった。英国軍の死者15名のうち9名、負傷者43名のうち11名は、米国空軍のパイロットが英国軍の車両を敵と誤認して攻撃したこと、すなわち友軍相撃による犠牲者であった。戦争終結後、マスコミは死亡率よりも、兵士たちに施された予防接種が引き起こした様々な症状、いわゆる「湾岸戦争症候群」に懸念を示した。予防接種の一部は、サダム・フセインが化学兵器や生物兵器を使用するという予想に基づき実施されたものであった。

湾岸戦争は、戦争前の予測と比較すると、実質的に死傷者をほとんど出さずに、かつ極

<sup>27</sup> Cordingley, *In the Eye of the Storm*, p. 110.

<sup>28</sup> Schwarzkopf, *It Doesn't Take a Hero*, p. 408; Roland Dannreuther, *The Gulf Conflict: A Political and Strategic Analysis*, Adelphi Paper no 264 (London: Institute for Strategic Studies, winter 1991-2), pp. 56-7.

<sup>29</sup> Cordingley, *In the Eye of the Storm*, pp. 111-13.

めて短期間で終結したという印象を与えた。これは特に地上作戦について言えることであり、地上作戦が行われた4日間という期間は航空作戦が行われた43日間とは対照的であった。この結果、湾岸戦争は冷戦時代への回帰というよりも、むしろ未来の前触れのように見えた。戦争の作戦次元及びエアランド・バトルは、ヨーロッパ内の国家間紛争において使用することを目的として1980年代に考案されたアイデアであった。この「第三次世界大戦」での使用を想定した構想が、中東での戦争に適用されたのである。湾岸戦争で使用されたスマート技術は大きな衝撃を与えた。この結果、これらの技術の先には明るい未来が待っている、これらの技術は米国及び同盟国の軍事的優位性を確実にする、という考え方が広がった。スマート爆弾は総投下爆弾数の10%を占めるのみであったにもかかわらず、イラク軍に与えた損害の75%がこの爆弾によるものであったという主張や、全部隊の2%を占めたF117ステルス戦闘機が全攻撃目標の31%を攻撃したという主張が喧伝された<sup>30</sup>。

とりわけ米国にとって湾岸戦争は、空中給油能力や米国内外の基地ネットワークにより世界のほぼ全域を網羅する、独立したエア・パワーの重要性を確認する機会を与えた。あわせて米国は、エア・パワーを大規模に使用するためには、湾岸戦争では弱点となった情報収集を強化しなければならないと判断した。これを受けて、ヒューミントよりもシグント、公開資料よりも秘密の情報源が重視された。この結果、2002年から2003年においても湾岸戦争時と同様に文化や社会を幅広く理解するという点に大きな死角が生じたのである。

湾岸戦争後の英国で広がった一般的な言説は、米国のものといささか異なっていた。英国において湾岸戦争は、単に米国一極体制の幕開けとしてだけでなく、冷戦後の世界における国連の力を示す兆候として評価されたのである。米国では、コリン・パウエルと統合参謀本部が、初期段階において戦争という手段に訴えることを渋り、かつ軍事的選択肢と政治的目標の調整に失敗したと批判された。米国では、イラク軍の壊滅やサダム・フセイン政権の転覆を達成していないことから、この戦争は不満が残る状態で尚早に終結したという評価が強まりつつあった。他方、英国ではこうした見解はさほど有力ではなかった。むしろ英国において湾岸戦争は、安保理決議に沿って進められ、かつイラク占領下からクウェートを解放するための武力行使を容認した安保理決議678を履行する中で英国の政治的目的を達成した、限定戦争のお手本となった<sup>31</sup>。

1994年、マルコム・リフキン(D Malcolm Rifkind) 国防大臣は、1990年に刊行された国防見直し報告書に代わる『フロントライン・ファースト (*Front-line First*)』と呼ばれる文

<sup>30</sup> McCausland, *The Gulf War*, p. 62.

<sup>31</sup> 以下を参照。Michael Howard, "Think Hard on Total War," *The Times*, 19 February 1991; また以下も参照。Lawrence Freedman, "The Gulf War and the New World Order," *Survival*, vol 32, no 3 (May/June 1991), pp. 195-209.

書を作成した。彼は、国連安保理の常任理事国としての立場とそれに付随する義務の観点から、英国の国際的な役割及び海外派兵の可能性について説明した。この中でリフキンドは、湾岸戦争をフォークランド紛争と結び付け、これらの戦争は短期かつ高烈度の戦闘が政策を実行する上での有効な手段になり得ることを証明していると説明した。このような見方は、1997年に労働党が保守党から政権を奪還した後も存続し、その後、1999年のコソボ紛争によってさらに強まった。そして、この見解は、2002年から2003年における信念、すなわち戦争は有用であるという考え方を支える基礎となったのである。

湾岸戦争の結果が英国軍に与えた影響は、さらに複雑であることが判明した。英国第1装甲師団は中東に派遣されたが、その時すでに国防省は、冷戦後初の防衛見直しとなる『変化の選択肢』を完成させていた。死傷者数の少なさは、政府の念頭にあった兵力削減の妥当性を支持する要因となった。歩兵は55個大隊から39個大隊に、装甲連隊は19個から11個に削減された。これに比例して砲兵、通信兵及び工兵も削減された。他方、湾岸戦争で戦闘ヘリコプターが果たした役割が評価されて、陸軍航空隊は削減を免れた<sup>32</sup>。王立空軍では、高度15,000フィート以下の飛行に反対した者の主張が正しかったことが証明された。しかし、この結果、他国の空軍と同様、無人航空機の有用性を認識するまでに必要以上に時間がかかった。20世紀末の時点で王立空軍は、武装したドローンを砲兵の一種として扱い、したがってこれを陸軍の管轄とすることに満足していた。さらに驚くべきことに、ヨーロッパ以外での作戦への意欲が復活したが、英国はシー・パワーと王立海軍が湾岸戦争で果たした功績をほとんど無視した。海外派兵に十分な商船トン数を確保することの重要性、ならびにイラク海上封鎖において海軍が果たした役割は、戦闘機や戦車を重視した言説の中で閑却されていた<sup>33</sup>。

戦争の作戦次元は、湾岸戦争後の英国軍事思想において神聖視された。軍団指揮の演習を行うことはNATO加盟国内で国家的な政策目標であり続けたにもかかわらず、実際に演習では不協和が絶えなかった。1992年、デ・ラ・ビリエールが退役し、これに伴って多国籍軍の指揮に参加した直接的な経験が失われた。ルパート・スミスは、さらに10年間軍務に就いた。後に彼は、1992年から1994年までの国防参謀総長補としての職務（英国の全ての作戦を統括するポスト）が、湾岸で第1装甲師団を指揮した経験（この経験を、彼は純粋に戦術的なものと定義した）以上に、自身の考え方にとって結果的に重要であったと語った。彼にとって湾岸戦争で第1装甲師団を指揮した経験は、冷戦中の体験に通じるものであった。その後、彼は、参謀総長補として幅広い責務を担った経験に基づき、「非

<sup>32</sup> McInnes, *Hot War, Cold War*, pp. 22-5.

<sup>33</sup> 以下を参照。Andrew Lambert, "The Sea War," in Pimlott and Badsey, *The Gulf War Assessed*.

軍事的、国家的及び国際的な意思決定プロセス」を自らが行う部隊指揮に取り入れた。このことは、特に1995年におけるバルカン半島の国連保護軍（UNPROFOR）多国籍軍司令官としての彼の指揮によく表れている<sup>34</sup>。

その最終的な結果として、スミスは彼が新たな戦争の形態と考えるものを明確に言語化した。彼は新たな戦争の形態を「住民の中で戦う戦争」と呼んだ。この概念は、湾岸戦争を、1930年代のソ連の作戦術から始まり、1939年から1941年までの西欧でドイツが獲得した数々の勝利を経て進展していた進化過程の最高到達点であるとは評価しなかった。むしろこの概念は、湾岸戦争を、新たなパラダイムへの転換の中間地点、すなわち「政治的手段と軍事的手段を融合させながら遂行する戦争」に移行する途上と見做すものであった<sup>35</sup>。この洞察は、古めかしくかつクラウゼヴィッツ的でもあるが、歴史的な変化よりも、スミス自身の経験を反映したものかもしれない。昇進するに従って、彼が政治と軍事の接点で戦争と向き合う機会は増加した。しかしながら、第一次湾岸戦争の10年後、スミスの洞察が実に適切であることが判明した。2001年9月11日の同時多発テロの発生後、米国は、イラク本土に侵攻するため再度多国籍軍を結成した。2003年の軍事行動は、国連安保理決議や域内パートナー諸国のいずれとも緊密に調整されたものではなかった。今回も、紛争が長期化するにつれて、指揮系統のさらに下層においても軍民が連携した活動が必要となった。この事実は、戦争の作戦次元に関する考え方の再定義、さらには戦術そのものの見直しへと繋がった。

<sup>34</sup> Rupert Smith, *The Utility of Force: The Art of War in the Modern World* (London: Allen Lane, 2005), pp. xiii, 186-7.

<sup>35</sup> Smith, *Utility of Force*, p. xiii.